

布団

山本マト

理恵がはっと目を覚ますとそこは寝室で、ベッドがひとつある。その上に初老の男が横たわっている。彼女は一瞬、体を震わせる。その衝撃で意識が覚醒し、否応なく現実に引き戻される。ゴールデンウィークを過ぎたばかりだということに、額からは大粒の汗が流れる。水色のシャツは肌に張り付き、カーディガンまで湿っている。

一か月前、理恵の夫である文彦が作業現場で事故を起こした。幸いにも周囲に人はおらず、怪我をしたのは文彦ひとりだった。

命を取り留めた代わりに、文彦は要介護者となった。それは理恵が介助のキーパーソンになるということでもあった。

理恵はたたみかけであった洗濯物を手際よく片していく。それが済んだら立ち上がり、隣の部屋であるキッチンへと向かう。冷蔵庫の中身をざっと確認する。

「買い物に行きましようか」と自身に問い、肯定とばかりに財布をもって寝室に向かう。

寝室の中央には真新しいリクライニングのついたシングルベッドがある。左隣には木製のキャビネットがある。

「買い物に行ってきます」

と理恵はベッドに横たわる夫に向けて言う。すると文彦は閉じていた瞼を開き、理恵と眼が合う。顔は動かさず、視線だけを理恵に向けている。もっとも、文彦の首は左右に五度ほどしか動かない。

「どこに出かけるんだ？」

「ええ、ちょっと買い物に。なにか買ってくるものはありますか？」

「煙草を買ってきてくれ」

理恵はキャビネットの上をみる。そこには未開封の煙草の箱が積み上げられている。それでも嫌な顔一つしない。

「わかりました。ほかには何かありますか？」

文彦は何も言わず目を閉じた。

「行ってきます」

無言を肯定と受け取った理恵は、胸に財布を抱いて家を出た。

家には文彦だけが残された。深いため息をひとつつき、眼球だけを動かして自身の体を見る。そこには足が二本、腕が二本ついている。

「動かない」

一言つぶやき、目を閉じた。

玄関を出ると、生ぬるい風が理恵の体に纏わりつく。エレベーターに乗って一階まで下りる。エントランスを抜けるとそこは公園のように緑で溢れている。陽光を浴びようと若芽が一斉に同じ方を向いている。

同僚夫婦が小さな緑の公園を抜けて理恵の横を通り過ぎる。理恵も会釈をするものの、夫婦は堅い笑みを浮かべるだけで愛想のひとつもない。

その理由を理恵はよく分かっている。理恵の住むマンションは文彦の会社の社宅である。事故とはいえ体を壊して働けなくなった文彦。同僚はそうなってもまだマンションに住み続ける理恵夫婦を恨めしく思っている。

同僚夫婦が見えなくなると、徒歩五分のところにあるスーパーへ向かう。

スーパーといっても大型のショッピングモールで、多種多様な商品が揃う複合施設になっている。ここで一週間分の食料を買い込む。

買い物袋を提げて家路に着くとき、理恵の後ろから彼女を呼ぶ声がした。

「あら、濱田さんこんにちは」

話しかけたその人のことを、理恵はあまり快く思っていない。それでも気丈に笑みを浮かべ、対峙する。

「お母さん、こんにちは……。お買い物ですか？」

「ええ、まあ。それよりご主人、大丈夫なの？　うちの主人も心配していますのよ。文彦さんはどうしてるんだって——」

お母さんといっても理恵の本当の母でも文彦の母でもない。社宅に住んでいる為に、そう呼称させられている。そして文彦の上司の妻でもある。

「元気ですよ。体は動かなくても、口は達者ですからね。今日も用事を頼まれているところなんですよ」

「まあ、それはなにより。でもおひとりで看られるのは大変でしょう。ご実家にお世話になってもよろしいんじゃないかしら」

夫人はガムを噛みながら話す。咀嚼するたびに金歯が見え隠れする。

「主人も待っていることですし、これで」

理恵は軽く頭を下げて歩き出す。

「そうですね。それではごきげんよう」

片道五分の道のりを、理恵は競歩でもするようにあくせく歩を進める。おかげで三分強ほどでマンションにたどり着いた。

「ただいま帰りました」

文彦に聞こえるようわざとボリュームを上げた声で言い、キッチンに向かう。買い物袋を置いて手を洗い、冷蔵庫を開けて購入した食材を補充していく。

「今日はキウイを買ったんですよ。今がちょうど食べごろみたいでしたので。すぐにお持ちしますね」

買ったばかりのキウイを食べやすい大きさにカットし、寝室に運ぶ。ひとりで食べることのできない夫に、理恵はフォークで食べさせようとする。

「自分で食べたい」

文彦は動かない右手を動かそうとする。しかし手は震えるだけで持ち上がらない。それでも文彦は力を抜くことなく続ける。

ようやく持ち上がった腕は物を掴むことすら難しいほど震える。なんとか口元までキウイをもってきても、寸前のところで落とした。

理恵は手伝おうとしたものの、文彦の顔を見て出した手を引っ込めた。

文彦はキウイを落とす。皿の上からなくなると、今度は膝の上に散在したキウイを震える手で時間をかけて食べ始めた。

「買ってきた煙草を置いていてくれ」

文彦は自分の手を動かす。リハビリ前に比べると、大分思い通りに動くようになっている。口元が綻んでいるのを、文彦は自分で気が付いていない。

理恵はキッチンから買ったばかりの煙草をもってくる。それをキャビネットの上に置く。

その瞬間、文彦の眉間に皺が寄る。

「なんだこれは」

理恵の背筋がピンと伸びきる。文彦を直視できず、俯いて生唾を飲み込む。そんな理恵を獐猛な野生の動物のような鋭い目で直視する。

「わたしはこれが吸いたいと、一度でも言ったことがあるか？ それともわたしが忘れていただけか？」

「でも……申し訳ありません。味が違うと気分も違ってくると……」

「気分が違うとは、今のわたしの気分など、お前に解ってたまるか！」

理恵は目を伏せたまま文彦の声を聞き、回答を選ぶように言葉を紡ぐ。

「申し訳ありませんでした」

短くそう言うと、買ってきたばかりの煙草を床灯台から下げる。文彦は般若の形相で理恵を睨んだ。

夕食時、二人の間に会話というものはなかった。どちらともが口を開かない。

一時間ほどかけて文彦が食べ終わる。文彦は煙草を銜え、火をつける。箸を持つことよりも、ひとりで煙草を吸う動作を文彦は早く取り戻した。

キッチンに立つ理恵は、皿を洗いながらクスッと笑みをこぼした。

キウイが食べごろをむかえた梅雨も間近の頃。文彦は箸で物を落とさず食べることが出来るほど回復した。

「コーヒーでも淹れてきますね」と理恵は寝室を出る。お湯を沸かし、フィルターでドリップしたコーヒーをカップに淹れ、寝室に戻る。

「もうすぐ梅雨ですね」

椅子に座りながら文彦にカップを渡す。文彦はまだ多少震える右手で受け取り、一口飲む。

「そういえば、今日スーパーでキウイを売っていたんですよ。小さい頃、近所の家にキウイの木がありました。よく頂いて食べたのを思い出して、つい買ってしまいました。剥いてきますね」

「ここで剥いてくれないか？」

理恵は多少戸惑ったように首を傾げるも「はい」とキウイをとりにいく。

買ってきたキウイは小ぶりで、皮を剥くとひとくちで食べられるほどの大きさしかない。

「小さい頃食べたキウイは、もう少し大きかった記憶があるんですけどね……」

「これくらいのほうが丁度いい」

剥き終わると、果物ナイフをキャビネットの上に置く。

文彦はキウイを受け取ると、頬張る。残った種を取り出し、右手でつかむ。理恵は布団の上に皿を置く。その中に種を入れ、新しいキウイに手を出す。

ひとりで食べ始めたのを確認した理恵は、キッチンに戻る。

文彦は部屋の向こうの理恵の後ろ姿を見た。そしてキャビネットの上に置いてあるナイフを震える手で掴み、掛け布団の下に忍ばせる。それからコーヒーがはいるまで文彦は理恵の後ろ姿を眺めていた。

風は凧ぎ、生ぬるく乾いた空気が寝室に滞る。文彦の額からは止まることなく大粒の汗が流れ落ちる。シャツの襟元から胸元までぐっしょりと濡れていて、服を着たままシャワーでも浴びたように湿っている。

夕食ができるかと理恵は料理を持って寝室にやってくる。丸椅子に腰掛け、そっと文彦の膝の上に盆を置く。右手に端を持たせ、そこから理恵は文彦の様子を見るだけとなる。

文彦はまだ少し震える手できちなく食事を摂りはじめる。それでも料理を落とすことなく口に運ぶ。

「おめでとうございます」

理恵は目を細くして言う。

「このぶんだと、すぐに歩けるようになりますね」

「ああ。お前のおかげだな」

文彦は目を閉じて、落ち着いた口調で言った。

食事が終わり、最後に水を飲もうと文彦がコップを手に取る。口元まで運ぶ途中、胸元でコップを落とした。服と布団に染み込む水。慌てて理恵は枕元にあったタオルで拭き始める。理恵と文彦の距離が数十センチまで縮まる。

その時、文彦は右手を掛け布団の中に潜らせる。理恵はシャツと布団をトントンとタオルで拭いている。

「大丈夫です。これくらいならすぐに乾きますけど、汗もかいていらっしゃいますし着替え……」

理恵は言葉の続きを発せない。口は動いているものの、声がでない。理恵の腹部に赤い染みがジワリと浮かび上がる。シャツは瞬く間に真っ赤に染まり、理恵は力なく文彦の胸に抱かれる。受け止める意思のない文彦の胸や腕は微動だにせず、理恵の体は胸を滑り落ちて文彦の膝で静止した。

文彦は震える手で煙草を吸う。ほんの数口吸ったところで赤く滲んだシートで煙草を消した。

ドアをたたく音が廊下に響く。なにごとかと現れる野次馬たちは、文彦の上司夫人の存在を確認すると、顔を見合わせて一様に黙り込む。

「これだけ呼んで出てこないんですもの。もう、開けても宜しいわよね」

誰に確認するでもなく夫人はそう呟くと、ポケットから鍵を取り出す。シリンダーに差し込み、軽い解錠音がする。

扉を開け、ズケズケと部屋に進入する。後ろをついてくる者はいない。支えるもののない扉は金属の擦れる音がして閉まる。廊下の野次馬たちは、鬼の居なくなった廊下で静かに話し始めた。

夫人は奥へと進む。間取りはマンション全部屋共通ため迷うことはない。短い廊下を抜けるとそこはリビングで、その向こうにはキッチンがある。悪臭はさらに濃くなり、夫人の香水の香りを凌駕する。

リビングのテーブルの上には皿がある。皿には白く一センチほどの小さな虫たちが這いずりまわっている。それを見た夫人は、手で口元を押さえて蹲る。

しばらくして夫人は立ち上がり、廊下へと引き返そうとした時、寝室が目に入った。そこにはベッドが一つある。物音をたてることなくすり足で近づく。

白い布団に黒い斑模様の染みができている。そこから顔をのぞかせるモノ。その顔にも、キッチンで見た一センチほどの虫がたかっていた。その量は先ほどの比ではない。夫人は目を逸らす。足元をみると、その白い虫が今にも夫人に接触しそうなほど接近していた。周囲を見ると、虫はキッチンや寝室だけでなく、いたるところで動き回っている。床をはじめ、カーテンや壁にも這い蹲っていた。

夫人は短い悲鳴をあげてつばを飲み込む。それからつま先立ちで小さく移動しながら部屋を出る。

扉は再び金属音を奏でながらゆっくりと閉まる。僅かな隙間から鼠が飛び出した。夫人や野次馬たちの足元を抜け、小鳥のように小さく鳴きながら階下へと消えた。続いて婦人が部屋から飛び出した。勢いよく飛び出した夫人に、野次馬たちは瞬時に会話をやめる。廊下には沈黙が流れる。

完全に扉が閉まる。キィという閉音が廊下に響く。その音に夫人は跳ね上がった。

そして部屋は沈黙に閉ざされた。